

資治通鑑 第134卷

【宋紀十六】 起柔兆執徐，盡著雍敦牂，凡三年。

■南宋、●北魏、続国訳漢文大成．經子史部 第8巻 103p

蒼梧王下元徽四年（丙辰，476年）

【魏の馮太后の稱制独裁政治】

■春，正月，己亥（9日），帝は籍田を耕し，大赦す。

●二月，魏の司空の東郡王の陸定國は恩を恃みて不法に坐して，官爵を免じて兵と為す。

●【魏の馮太后は顯祖を暗殺し独裁】魏の馮太后は内行に不正あり，李奔之死（132 卷明帝泰始六年）するを以て顯祖を怨み，密かに鴆毒を行い，夏，六月，辛未（14日），顯祖は殂す（年は23）。壬申（15日），大赦し，改元して承明とす。顯祖を金陵（雲中にあり）に葬し，諡して獻文皇帝と曰う。

●魏の大司馬、大將軍の代人の萬安國は矯詔して神部（八部の1）の長奚買奴を殺すに坐して，死を賜わる。

●【馮太后の政治体制】戊寅（20日），魏は征西大將軍、安樂王の長樂を以て太尉と為し，尚書左僕射、宜都王の目辰を司徒と為し，南部尚書の李訢を司空と為す。皇太后を尊びて太皇太后と曰い，復た（高宗没後一度稱制）朝に臨んで稱制す。馮熙を以て侍中、（8-103p）太師、中書監と為す。熙は自ら外戚なるを以て，内任を固辭す。乃ち都督、洛州（晋の司州）刺史に除す，侍中、太師は故の如し。

●【太后は賢明な判断で頭角】顯祖の神主は祔太廟に祔（合祀）し，有司は奏し，「廟中の執事之官は，故事に依りて皆な爵を賜わらんを請う。」

秘書令の廣平の程駿は上言して、

「侯を建て地を裂くは，帝王の重んずる所なり，或いは親賢を以てし，或いは功伐（勞を以て國を定める功、功を積む伐）に因り，未だ神主を廟に祔し而して百司の封を受ける者は聞かざる也。皇家の故事は，蓋し一時之恩なり，豈に長世之法と為す可きか乎！」

太后は善しとして而して之に従い，群臣に謂って曰く、

「凡そ事を議すには，當に古典に依りて正言すべく，豈に但に故事に修（循）^{したが}いて而して已むを得るかな！」（続は乃ち）駿に衣一襲，帛二百匹を賜る。

●【馮太后の性格と政權の実態】太后は性は聰察にして，書や計を知り，政事を曉り，被服は儉素にして，膳羞（ご馳走）^{ぜんしゅう}を故事より什に七八に於いて減ず。而るに猜忍（疑い深くて無慈悲）にして權數は多し。高祖は性は孝に至り，能く顔を承けて志に順ず。事は大小と無く，皆な成を太后に仰ぐ。太后は往往にして專決し，復た帝に關白せず。幸する所の宦者や高平の王琚、安定の張祐、杞嶷、馮翊の王遇、略陽の苻承祖、高陰の王質，皆な勢に依りて事を用う。祐の官は尚書左僕射に至り，爵は新平王たり。琚の官は征南將軍に至り，爵は高平王たり。嶷等の官も亦た侍中、吏部尚書、刺史に至り，爵は公、侯と為り，賞賜は巨萬，鐵券（功ある臣に分ける契約の割符）を賜わり，許すに死せざるを以てす。又た，太卜令の姑臧の王睿は太后の幸を得て，超遷して侍中、吏部尚書に至り，爵は太原公たり。秘書令の李冲は，才を以て進むと雖も，亦た私寵に由りて，賞賜（太和末年の高菩薩の禍は太后が啓く、其の世を終るを獲たりと雖も禍は門戸に及ぶ）は皆な勝^あげて紀す可からず。又た外の人望の東陽王の丕、游明根等を禮し，皆な其の優厚を極め，睿等に褒賞する毎に，輒ち丕等を以て之に參ぜしめ，以て私せざるを示す。丕は，烈帝（拓跋騁槐）之玄孫。冲は，寶（魏の世祖太平

眞君五年に李寶は入朝し、子は魏の貴顕となる) 之子也。

● **【太后の疑心暗鬼と淡泊さ】**太后は自ら行いを失するを以て、人(統により+)の己を議するを以て畏れ、群下の語言に小さく疑忌に^{わた}涉れば、輒ち之を殺す。然るに寵幸する所の左右には、苟しくも小過有りといえ、必ず笞極(垂木)を加え、或は百餘に至る。而れども憾(恨み)に宿する無く、尋いで復た之を待つこと初めの如く、或は此に因りて更に富貴なり。故に左右は罰せ被れると雖も、終に離心無し。

【京口の劉景素の反乱】

■乙亥(18日)、蕭道成に尚書左僕射、劉秉に中書令を加える。

■ **【建平王の景素の反乱鎮圧】**楊運長、阮佃夫等は建平王の景素(452年-476年)を忌むに益々甚しく、景素は乃ち録事參軍の陳郡の殷灝、中兵參軍の略陽の垣慶延、參軍の沈顥、左暄等と謀りて自ら全くする之計を為す。人を遣わして建康に往來し、才力之士を要結せしめ、冠軍將軍の黃回、游擊將軍の高道慶、輔國將軍の曹欣之、前軍將軍の韓道清、長水校尉の郭蘭之、羽林監(漢の東都の制では羽林左右監は羽林騎を主り光祿勳に属す、晉は羽林は二衛に属し監は見えず、江左は踏襲)の垣祗祖、皆な陰に與に通謀す(8-105p)。武人の志を得ざる者は、之に歸さざるは無し。時に帝は獨り出でて郊野を遊走するを好み、欣之は石頭城に據りて、帝の出でるを伺い亂を作さんと謀る。道清、蘭之は蕭道成に帝の夜出づるに因りて、帝を執り景素を迎えるを説き、道成が従わざる者ならば、即ち之を圖らんと欲す。景素は毎に禁じ之を緩くせ使む。楊、阮は微かに其の事を聞き、僇人(江南・楚の人)の周天賜を遣わして偽わりて景素に投じさせ、勸めて舉兵せ令めんとす。景素は之を知り、天賜を斬りて首を台に送る。

■ **【景素は京口にて挙兵、鎮圧される】**秋，七月，祗祖は數百人を帥いて建康より京口に奔り、「京師は已に潰亂せり」

と雲い、勸めて速かに入ら令む。景素は之を信じ、戊子(1日)、京口に據りて兵を起こし、士民の之に赴く者は以て千を數える。楊、阮は祗祖の叛して走るを聞き、即ち命じて纂嚴せしむ。己丑(2日)、驍騎將軍の任農夫、領軍將軍(上では冠軍將軍?)の黃回、左軍將軍の蘭陵の李安民を遣わして歩軍を將い、右軍將軍の張保は水軍を將い、以て之を討たしむ。辛卯(4日)、又た南豫州刺史の段佛榮に命じて都統(こが初め)と為す。蕭道成は黃回の異志有るを知り、故に安民を使わし、佛榮をして之と偕に行かしむ。回は私に其の士卒を戒めて、

「道に京口の兵に逢えば、戦うを得る勿かれ。」

道成は玄武湖に屯し、冠軍將軍の蕭贍は東府に鎮す。始安王の伯融、都郷侯の伯猷、皆な建安王の休仁之子也、楊、阮は其の年長を忌み、悉く詔を稱して死を賜う。景素は竹裡を斷つて以て台軍を拒まんと欲す。垣慶延、垣祗祖、沈顥は皆な曰く、

「今天時は旱熱にして、台軍は遠く來たりて疲暍す、之を引いて至ら使めば、逸すを以て(疲)勞を待ち、一戦して而して克つ可し。」

殷灝等は固く争えども、得る能わず。農夫等は既に至り、火を縦ちて市邑を燒く。慶延等は各々相い顧望し、鬥志有るは莫し。景素は本より威略に乏しく、恒擾して為す所を知らず。黃回は段佛榮に迫られ、且つ京口軍の弱きを見、遂に發せず(形勢觀望して裏切れず)。張保は西渚(京口の西)に泊し、景素の左右の勇士數十人、自ら相い要結し、進みて水軍を撃つ。甲午(7日)、張保は敗死し、而して諸將は相い應じて赴かず、復た台軍の破る所と為る。台軍は既に城下に(肉)薄し、顥は先ず衆を帥いて走り、祗祖は之に次ぎ、其の餘の諸軍は相い繼いで奔り退き、獨り左暄は台軍と萬歲樓の下で力戦す。而るに配する所の兵力

は甚だ弱く、敵する能わず而して散る。乙未（8日）、京口を抜く。黄回の軍は先に入り、自ら諸王を殺さずと誓い有るを以て、乃ち景素を以て殿中將軍の張倪奴に譲る。倪奴は景素を擒にし、之、並びに其の三子を斬り、同黨の垣祗祖等の數十人は皆な伏して誅す。蕭道成は黄回を釋し、高道慶は問わず、之を撫でて舊の如し。是の日、嚴を解く。丙申（9日）、大赦す。

■【沈攸之の救援軍は疑われる】初め、巴東の建平の蠻は反し、沈攸之は軍を遣わして之を討つ。景素の反するに及び、攸之は急に峽中の軍を追いて以て建康に赴く。巴東太守の劉攘兵、建平太守の劉道欣は攸之の異謀有るを疑い、兵を勒して峽を斷ち、軍の下るを聽さず。攘兵の子の天賜は荊州の西曹為り、攸之は天賜を遣わして往きて之を諭さしむ。(8-106p)攘兵は景素の實に反すを知り、乃ち甲を釋き愆ちを謝し、攸之は之を待つこと故の如し。劉道欣は堅く建平を守り、攘兵は譬説(さとし説く)すれども回らず、乃ち與に蠻軍を伐ち攻めて之を斬る。

●甲辰（17日）、魏主は其の母の李貴人(李惠の娘、高祖の母)を追尊して思皇后と曰う。

■八月，丁卯（10日）、皇弟の翽を立てて南陽王と為し、嵩を新興王と為し、禧を始建王と為す。

■庚午（13日）、給事黄門侍郎の阮佃夫を以て南豫州刺史と為し、留まりて京師に鎮せしむ。

■九月，戊子（2日）、驍騎將軍の道慶に死を賜わる。

■冬，十月，辛酉（5日）、吏部尚書の王僧虔を以て尚書右僕射と為す。

●十一月，戊子（3日）、魏は太尉、安樂王の長樂を以て定州刺史と為し、司空の李訢を徐州刺史と為す。

蒼梧王下升明元年（丁巳，477年）順皇帝

(順皇帝の諱は準、字は伸謨、明帝の第三子、小字は知觀、実は桂陽王休範の子)

●春，正月，乙酉朔（1日）、魏は改元して太和とす。

●己酉（1日）、略陽の氐(統は民)王の元壽は衆五千餘家を聚め、冲(統は衝)天王と自稱す。二月，辛未（17日）、魏の秦、益二州刺史の尉洛侯は撃ちて之を破る。

●三月，庚子（17日）、魏は東陽王の丕を以て司徒と為す。

●夏，四月，丁卯（14日）、魏主は白登に如く。壬申（19日）、崢山に如く。

【蒼梧王の悪行極まる】

■【蒼梧王・後廢帝の放浪癖】初め、蒼梧王(463-477)は東宮に在るや、漆や帳竿に緣(よじ登)り、地を去るに丈餘ありを好む(輕業を得意とする)。喜怒は節に乖きて、主帥(東宮齊内の)は禁ず能わず。太宗は陳太妃(蒼梧王の母親)に屢々敕して痛く之を捶たしむ。即帝位に及び、内に太后、太妃を畏れ、外に諸大臣を憚り、未だ敢えて縦に逸せず。元服を加えしより、内外に稍々以て制する無く、數々出でて遊行す。始め宮を出るには、猶ほ儀衛を整える。俄に而して車騎を棄て、左右の數人を帥い、或いは郊野に出、或いは市廛に入る。太妃は毎に青犢車(晋制に諸王・皇太后の乗る青蓋車)に乗り、隨いて相い檢攝(約束監督)す。既に而して輕騎にて遠く走るは一二十里、太妃は復た追う能わず。儀衛は亦た禍を懼れて敢えて追い尋ねず、唯だ部伍を整え、別に一處に在(統は往)り、瞻望して而して已む。

■【蒼梧王の虐殺趣味の恐怖】初め、太宗は嘗て陳太妃を以て嬖人(お気に入り)の李道兒に賜い、已に復た迎え還り、帝を生む。故に帝は微行する毎に、自稱「劉統(自ら天下を統べる)」といい、或いは「李將軍」と稱す。常に小褲(ずぼん)衫(單衣)を著け、營署(アジトを作る?)巷陌(ちまた)に、貫穿(貫き穿つ)せざる無

し。或いは夜は客舎に宿し、或いは晝は道旁に臥し、廝養（馬飼などの雑用係）を排突（押しのける）し、之と交易し、或いは慢辱に遭えども、悦んで而して之を受く。凡そ諸々の鄙事（いやしい事柄）、（8-107p）衣を裁ち、帽を作り、目を過ぎるは則ち能くす。未だ嘗て簾（横笛）を吹かず、管（縦笛）を執りて便ち韻（音律整う）す。京口の既に平らぐに及び、驕恣は尤も甚しく、日に出でざる無く、夕に去りて晨に返り、晨に出でて暮に歸る。従者は並んで鋌矛（小矛、一金延矛）を執り、行人の男女及び犬馬牛驢に、逢いて免かるる者無し。民間は擾い懼れ、商販は皆な息み、門戸は晝も閉まり、行く人は殆ど絶える。針、椎、鑿、鋸、左右を離さず、小しく意に忤（さから）う有れば、即ち屠剖（とぼう）を加え、一日殺さざれば、則ち慘然としと樂しまず。殿省は憂い惶れ、食は息を保たず。阮佃夫と直閣將軍申伯宗等は謀り帝が江乗に出でて雉を射るに因りて、太后令と稱し、隊仗（隊主仗主）を喚びて還り、城門を閉め、人を遣わして帝を執えしめて之を廢し、安成王の准を立てんとす。事覺われ、甲戌（21日）、帝は佃夫等を収め之を殺す。

■ 〔蒼梧王は太后の毒殺を謀る〕 太后は數々帝に訓戒し、帝は悦ばず。端午に會し、太后は帝に毛扇を賜う。帝は其の華かならざるを嫌い、太醫をして藥を煮さ令めて、太后を鳩（毒殺）せんと欲す。左右は之を止めて曰く、

「若し此の事を行えば、官（天子）は便ち應に孝子（父母の喪に服する）を作るべし、豈に復た出入の狡獪（江南の人は小児の戯を狡獪という、いたずらすること）するを得んや！」

帝は曰く、

「汝の語は大いに理有り！」

乃ち止む。

■ 〔同謀者も残酷に誅殺〕 六月，甲戌（22日）、

「散騎常侍の杜幼文、司徒左長史の沈勃、游擊將軍の孫超之は與に阮佃夫の同謀者」

と告げる有り、帝は登ちに衛士を帥いて、自ら三家を掩（おそ）い、悉く之を誅し、剗解（切り身）割して、嬰孩（嬰兒）も免れず。沈勃は時に喪に居し廬（倚廬、喪に居る所）に在り、左右未だ至らず、帝は刀を揮（ふる）いて獨り前にあり。勃は免かれざるを知り、帝の耳を手で搏（つか）み、唾して之を罵って曰く、

「汝の罪は桀、紂を逾え、屠戮せられんこと日無し。」

遂に死す。是の日、大赦す。

■ 〔帝は嘗て蕭道成を射る〕 帝は嘗て直ちに領軍府に入る。時に熱い盛り、蕭道成（427-482）は裸袒にて晝臥す。帝は室内で道成を立て、腹を畫して的と為し、自ら滿に引いて、將に之を射んとす。道成は（神色変ぜずに）板（太平御覽人事部には袂に作る）を斂（おさ）めて曰く、

「老臣は無罪なり。」

左右の王天恩は曰く、

「領軍の腹は大、是は塙（あざち）（的の盛り土）を射るが佳し。一箭にして便ち死せば、後に復た射るは無し。髀箭（骨鏃の矢）を以て之を射るに如かず。」（胡三省は骨鏃でも人を害するので、髀箭は骨鏃ではないと。字からは頭を包んだ鏃か）

帝は乃ち更に髀箭を以て射、其の臍に正中する。弓を投げて大いに笑って曰く、

「此の手は何如！」

帝は道成の威名を忌み、嘗て自ら鋌（小さな武器）を磨きて、曰く、

「明日は蕭道成を殺すぞ！」

陳太妃は之を罵（ののし）って曰く、

「蕭道成は國に功有り、若し之を害すれば、誰か復た汝の為に力を盡くす邪！」

帝は乃ち止む。

■道成は憂い懼れ、密かに袁粲、褚淵と廢立を謀る。粲は曰く、

「主上は幼年、微かに過ぎれば改め易し。伊、霍^{かく}（俄）之事、季世の行う所に非らず。縦え功成使むとも、亦た終に地を全くす無し。」

淵は默然とす。領軍功曹の丹陽の紀僧真は道成に言つて曰く、

「今朝廷は猖狂^{しょうきやう}（正気のさたでない）、（8-108p）人は自ら保たず。天下之望みは、袁、褚に在らず、明公は豈に坐して夷滅を受け得るや！存亡之機は、仰ぎて熟慮を希う。」

道成は之を然りとす。

■「蕭道成立つを思いとどまる」或るひとは道成に、

「廣陵に奔りて兵を起こすべし」

と勸める。道成の世子の贖は、時に晉熙王の長史^{ちやうし}為り、郢州の事を行い、贖をして郢州兵を將いて東下して京口に會さ使めんと欲す。道成は密かに親しむ所の劉僧副を遣わして其の從兄の行青、冀二州刺史の劉善明に告げて曰わしむ、

「人は多く勸め見るに北して廣陵を固めんと、恐らくは未だ長算と為さず。今秋風は行々起こり、卿は若し能く垣（榮祖）東海と微かに共に虜を動かせば、則ち我の諸々の計立つ可し。」

亦た東海太守の垣榮祖に告げる。善明は曰く、

「宋氏は將に亡びんとするは、愚智は共に知り、北虜が若^{（続による、苦x）}し動けば、反つて公の患と為らん。公は神武は世に高し、唯だ當に靜かにして以て之を待つべく、機に因りて奮發せば、功業は自ら定まり、遠く根本を去り、自ら猖蹶^{しょうけつ}（猛威）に貽す可からず。」

榮祖は亦た曰く、

「領府（領軍府）は台を去ること百歩、公が走れば、人は豈に知らざらんや！若し單騎にして輕行し、廣陵の人は閉門して受けずば、公は何くに之かんと欲するや！公は今足を動かして床を下れば、恐らくは即ち台門を叩く者（これを告げる者）有り、公の事は去るかな矣。」

紀僧真是曰く、

「主上は無道と雖も、國家累世之基は猶ほ安固と為す。公の百口、北に度りて必ず俱にするを得ざらん。縦え廣陵城を得るとも、天子は深宮に居り、號令を施し、公を目して逆と為せば、何んぞ以て之を避けんや！此くは萬全の策に非らざる也。」

道成の族弟の鎮軍長史の順之（蕭衍の父）及び次子の驃騎從事中郎の嶷、皆な以て為す、

「帝は道路を單行するを好み、此に於いて計を立てれば、以て成功すは易し。外州に兵を起こすは、克捷する有るは鮮なし、徒^{すく}に人に先んずれば禍を受ける耳。」

道成は乃ち止む。

■東中郎司馬、行會稽郡事の李安民は江夏王の躋を奉じて東方に兵を起こさんと欲し、道成は之を止める。

【蒼梧王の殺害と万歳】

■「王敬則是道成と結ぶ」越騎校尉の王敬則是潜かに自ら道成に結び、夜に青衣を著け、道路を扶匍^{ほふく}し、道成の為に帝之往來を聽察す。道成は敬則に命じて帝の左右の楊玉夫、楊萬年、陳奉伯等二（続による、一x）十五人と陰かに結び、殿中に於いて機便^{けいべん}を詞伺（さぐり）せしむ。

■秋、七月、丁亥（6日）夜、帝は微行して領軍府の門に至る。左右は曰く、

「一府は皆な眠り、何の牆に縁りて入らざるや？」

帝は曰く、

「我は今夕一處にて適（戯）を作さんと欲す、宜しく明夕を待つべし。」

員外郎の桓康等は道成の門間に於いて之を聴く。

■ 「廢帝・蒼梧王の殺害、皆万歳」 戊子（7日）、帝は露車（天蓋の無い車）に乗り、左右と台岡（台城の東岡）にて賭跳す。仍ち青園の尼寺に往きて、晩、新安寺（孝武帝の寵妃の殷貴妃の為の寺、子の子鸞が新安王になった）に至り狗を偷み、曇度道人に就きて之を煮る。飲酒して酔い、仁壽殿に還りて寝る。（8-109p）楊玉夫は常に帝意を得、是に至りて忽ち之を憎む、見れば輒ち切齒して曰く、

「明日は當に小子を殺し、肝肺を取らん！」

是の夜、玉夫をして織女の度河（七夕）を伺わ令めて、曰く、

「見れば當に我に報ぜよ。見ずんば、將に汝を殺さん！」

時に帝の出入は常無く、省内諸閣は、夜は皆な閉めず、廂下は相い逢値するを畏れて、敢えて出る者無し。宿衛は並びて逃避し、内外は相い禁攝する莫し。是の夕、王敬則是外に出る。玉夫は帝の熟寝せるを伺い、楊萬年と帝の防身の刀を取りて之を刎ねる。廂下に敕して伎を奏さしめ、陳奉伯は其の首を袖にし、常行の法に依りて、敕と稱して承明門を開かしめて出で、首を以て敬則に與える。敬則是馳せて領軍府に詣り、門を叩いて大呼す、蕭道成は蒼梧王の之を誑かすを慮りて、敢えて開門せず。敬則是牆上に其の首を投げ、道成は洗いて視、乃ち戎服乗馬して而して出で、敬則、桓康等は皆な従う。宮に入り、承明門に至り、詐りて行きて還る為す。敬則是内人の覘き見るを恐れ、刀環を以て窰孔（圭竇、けいとうとは壁に開けたくぐり戸）を塞ぎ、門を呼ぶこと甚だ急にして、門は開きて而して入る。他の夕、蒼梧王は開門の毎に、門者は震懾し、敢えて仰ぎ視ず、是に至り之れ疑わ弗。道成は殿に入り、殿中は驚き怖れる。既に而して蒼梧王の死を聞き、咸な萬歳を稱す。

■ 「諸侯は蕭道成の即位を促す」 己丑（8日）旦、道成は戎服して殿庭の槐樹の下に出で、太后令を以て袁粲、褚淵、劉秉を召して入りて會議す。道成は秉に謂って曰く、

「此くは使君の家事なり、何を以て之を斷じるか？」

秉は未だ答えず。道成は鬚（続は須）髯は盡く張り、目の光は電の如し。秉は曰く、

「尚書の衆事は、以て付せ見る可し。軍旅の處分は、一に領軍に委ねる。」

道成は次に袁粲に譲り、粲は亦た敢えて當らず。王敬則是白刃を抜き、床側に在りて跳躍して曰く、

「天下の事は皆な應に蕭公に關すべし！敢えて一言を開く者有れば、敬則の刀を血染るべし！」

仍ち白紗帽（皇太子級の帽子）を手に取り道成の首に加えて、位に即か令めて、曰く、

「今日は誰か敢えて復た動かん！事は須らく熱に及ぶべし（時期を逸するなどの意味）！」

道成は正色して之に呵（続は叱）して曰く、

「卿は都て自ら解せずや！」

粲は言有らんと欲し、敬則は之を叱り、乃ち止む。褚淵は曰く、

「蕭公に非ざれば以て此を了する無し。」

手ずから事（褚淵傳には事を書とする）を取りて道成に授ける（実権掌握）。道成は曰く、

「相與に肯ぜずんば、我は安んぞ辭するを得るや！」

乃ち議を下し、法駕を備えて東城（東府城）に詣り、迎えて安成王を立てんとす。是に於いて長刀をもって粲、秉等を遮り、各々は色を失いて而して去る。秉は出でて、路に従弟の輜に逢い、輜は車を開いて迎え

て問って曰く、

「今日之事は、當に兄に歸すべき邪？」

秉は曰く、

「吾等は已に領軍（蕭道成）に讓る矣。」

韞は膺を拊ちて曰く、

「兄の肉中に詎ぞや血有る邪！今年族せられん矣！」

■ 〔安成王の即位〕 是の日、太后令を以て、(8-110p) 蒼梧王の罪惡を數えて、曰く、

「吾は密かに蕭領軍に令して潜かに明略を運らしむ。安成王の准は、宜しく萬國に臨むべし。」

追封して昱を蒼梧王と為す。儀衛は東府の門に至り、安成王は門者に令して開く勿からしめ、以て袁司徒を待つ。粲は至り、王は乃ち入りて朝宮に居す。

壬辰（11日）、王は皇帝に即位す、時に年は十一。改元（昇明）し、大赦す。蒼梧王を郊壇（台の南）の西に葬す。

● 魏の京兆康王の子推は卒す。

■ 〔蕭道成の専制体制〕 甲午（13日）、蕭道成は出でて東府に鎮す。丙申（15日）、道成を以て司空、録尚書事、驃騎大將軍と為す。袁粲を中書監に遷す。褚淵に開府儀同三司を加える。劉秉を尚書令に遷し、

中領軍を加える。晉熙王の變を以て揚州刺史と為す。劉秉は始め謂えらく、

「尚書は萬機の本なり、宗室を以て之に居らせば、則ち天下に變無し」

既に而して蕭道成は軍國を兼ねて總べ、心膂（胸と背骨、親しい人）を佈置し、與奪（与奪の權）は自ら専らとし、褚淵は素より相い憑附（ひょうぷ、怨靈が乗り移る）し、秉と袁粲は閑手（かくしゅ、位のみで実權無し）して成を仰ぐ矣。辛丑（20日）、尚書右僕射の王僧虔を以て僕射と為す。丙午（25日）、武陵王の贊を以て郢州刺史と為す。蕭道成は改めて南徐州刺史を領す。

● 八月，壬子（1日）、魏は大赦す。

■ 〔袁粲は蕭道成の牽制を志す〕 癸亥（12日）、袁粲を詔して石頭に鎮ぜしむ。粲は性は冲靜、朝命有る毎に、常に固辭す。逼切せられて已むを得ず、乃ち職に就く。是に至り蕭道成の不臣之志有るを知り、陰（ひそか）に之を圖らんと欲し、即時に命を受（続は順）ける。

■ 初め、太宗は陳昭華（女官の名前）をして順帝を母養せ使む。戊辰（17日）、昭華を尊びて皇太妃と為す。

● 丙子（25日）、魏は詔して曰く、

「工商早隸（そうれい、賤民家来）は、各々は厥の分有り。而して有司は縦濫し、或は流俗（「北史」には清流）に染まる。今より戸内に工役有る者は、唯だ本部の丞に止める。若し勲勞有る者は、此の制に従わず。」

■ 蕭道成は固く司空を讓る。庚辰（29日）、以て驃騎大將軍、開府儀同三司と為す。

● 九月，乙酉（5日）、魏は更に律令を定める。

■ 戊申（28日）、楊玉夫等二十五人を封じて侯、伯、子、男と為す。

● 冬，十月，氏帥の楊文度は其の弟の文弘を遣わして魏の仇池を襲わしめ、之を陷（おとし）れる。

【魏の李訢は誅殺される】

● 〔魏の李訢は范曄を信用する〕 初め、魏の徐州刺史の李訢（りきん）は、顯祖（つか）に事えて倉部尚書（晉武帝は倉部郎を置き、度支尚書に属す。魏も置く、前の太倉尚書）と為り、盧奴令の范曄（はんひょう）を信用す。訢の弟の左將軍の瑛は諫めて曰

く、

「**𢇛**は能く人に降るには色を以てし、人に假すには財を以てし、徳義を輕んじて而して勢利を重じる。其の言を聴く也甘く、其の行の察する也賊にして、早に之を絶たずんば、後悔及ぶ無し。」

𢇛は従わず、腹心之事、皆な以て**𢇛**に語る。

●**「越黒は李𢇛を怨み誅殺す」**尚書の**越黒**は、(8-111p) 𢇛と皆な**顯祖**に寵有り、對して選部を掌る。𢇛は其の私に人を用いて方州(刺史)と為すを以て、**黒**は**顯祖**に對して之を發き、是に由りて隙有り。之れ頃くして、𢇛は**黒**が前に監藏と為り、官物を盗用するを發いて、**黒**は坐して黜けられて門士と為る。**黒**は之を恨み、寢食は之の為に衰少となる。年を逾え、復た入りて侍中、尚書左僕射と為り、選を領す。

●**顯祖**の殂するに及び、**黒**は**馮太后**に白す、

「𢇛は專恣なり」

稱し、出して徐州と為す。**范𢇛**は**太后**が𢇛を怨む(其の李敷を告げしを以てなり、132 卷明帝泰始六年)を知り、乃ち𢇛の外叛を謀ると告ぐ。**太后**は𢇛を征(統は徴)して平城に至らしめて狀を問い、𢇛は對えて、

「之れ無し」

太后は**𢇛**を引いて之を證さ使む。**𢇛**は**𢇛**に謂って曰く、

「汝は今我を誣う、我は復た何をか言わん！然るに汝は我が恩を受けること此くの如く之厚きに、乃ち忍んで爾と為す乎！」

𢇛は曰く、

「**𢇛**が公の恩を受けるは、公が**李敷**の恩を受けるに何如か！公は之を為すに**敷**に於いて之を忍び、**𢇛**は何為れぞ公に於いて忍ばざるか！」

𢇛は慨然として歎じて曰く、

「吾は**瑛**の言を用いず、之を悔いて何ぞ及ばん！」

趙黒は復た中に於いて其の罪を構成す。丙子(26日)、𢇛及び其の子の**令和**、**令度**を誅す。**黒**は然る後に寢食は故の如し。

●**十一月**、癸未(3日)、魏の徵西將軍の**皮歡喜**等三將軍は衆四萬を帥いて**楊文弘**を撃つ。

●**「張白澤は馮太后を諫める」**丁亥(7日)、魏の懷州の民の**伊祁苟**は自ら(伊祁)堯の後を稱し、重山(河南省河北道輝県、現・新郷市輝県市)に於いて衆を聚めて亂を作す。洛州刺史の**馮熙**は討ちて之を滅す。**馮太后**は盡く闔城之民を誅さんと欲し、雍州(魏では京兆・扶風・馮翊・咸陽・北城・平秦・武都などの郡を統べる)刺史の**張白澤**は諫めて曰く、

「凶渠逆黨は、盡く已に梟夷す。城中は豈に忠良仁信之士無からん、奈何して白黒(統は黑白)を問わず、一切之を誅せんや！」

乃ち止む。

●**十二月**、魏の**皮歡喜**の軍は建安(水經注に楊定は隴右より徙りて歷城に治す、仇池を去ること120里、歷城は後に建安。甘肅省渭川道成県、現・隴南市成県)に至り、**楊文弘**は城を棄てて走る。

【**沈攸之の叛乱勃発**】

■**「沈攸之の動向」**初め、**沈攸之**は**蕭道成**と大明、景和之間に於いて同じく殿省に直し、深く相い親善し、**道成**の女は**攸之**の子の中書侍郎の**文和**の婦と為る。**攸之**は荊州に在り、直閣將軍の**高道慶**、家は華容(湖北省荊南道監利県、現・荊州市監利市)に在り、假(休暇)して還り、江陵を過ぎ、**攸之**と**戲梨**(双六遊び)を争う。

馳せて建康に還るりて言う、

「**攸之**の反狀は已に成る、三千人を以て之を襲はんを請う。」

と言う。執政は皆な以て為すに可ならずとし、**道成**は仍って其の然らざるを保證す。**楊運長**等は**攸之**を惡み、密かに**道慶**と謀り刺客を遣わして**攸之**を殺さんとす、克たず。會々**蒼梧王**の弑に遇い、主簿の**宗儼之**、功曹の**臧寅**は**攸之**に此に因りて兵を起こすを勸める。**攸之**は其の長子の**元琰**が建康に在りて司徒左長史に為るを以て、故に未だ發せず。**寅**は、**凝之**（127 卷宋文帝元嘉 30 年に見える）之子也。

■ 〔沈攸之は決断せず〕 時に**楊運長**等は已に内に在らず（外官に出る）、**蕭道成**は**元琰**を遣わして**蒼梧王**の^{こしやく}剗斫之具を以て**攸之**に示す。**攸之**は**道成**の名位は素より己の下に出でたるに、（8-112p）一旦朝權を專制するを以て、心平らかならず、**元琰**に謂って曰く、

「吾は寧ろ**王陵**（**王陵**・**賈充**は魏紀に見える）と為りて死すとも、**賈充**と為りて生きず。」

然るに亦た未だ兵を擧げるに暇あらず。乃ち上表して慶を稱し、因りて**元琰**を留める。2021-1010

■ 〔張敬兒の準備〕 雍州刺史の**張敬兒**は、素より**攸之**の司馬の**劉攘兵**と善く、**攸之**の將に事を起こすを疑い、密かに以て**攘兵**に問う。**攘兵**は言う所無く、**敬兒**に馬鐙一隻を寄こし、**敬兒**は乃ち之が備えを為す。

■ 〔沈攸之の拳兵〕 **攸之**は素書（白い絹の書いた書）十數行有り、常に韜^{つつ}みては^{りょうとう}襦褌（打ち掛け）の角に在り、雲わく、

「是は**明帝**が己と約誓すなり。」

攸之は將に兵を擧げんとし、其の妾の**崔氏**は諫めて曰く、

「官（宋齊ではその主を官と呼ぶ）の年已に老いたり、那して百口の計を為さざるや！」

攸之は^い襦褌の角を指さして之に示し、且つ、

「**太后**の使い至り、**攸之**に燭を賜う、之を割きて、**太后**の手令を得て『社稷之事は、一に以て公に委ねる』と云えり」

と稱す。

是に於いて兵を勒し檄を移し、遣使して**張敬兒**及び豫州刺史の**劉懷珍**、梁州刺史の梓潼の**范柏年**、司州刺史の**姚道和**、湘州行事の**庾佩玉**、巴陵内史の**王文和**を邀え、同じく擧兵せんとす。**敬兒**、**懷珍**、**文和**は並びて其の使を斬り、表を馳せて以て聞ず。**文和**は尋ぎて州（巴陵は州にあらず、郡に作るべし）を棄て夏口に奔る。

柏年、**道和**、**佩玉**は皆な兩端^{いだ}を懷く。**道和**は、後秦の**高祖**（**姚興**）之孫也。

■ 〔沈攸之の宣戰布告文〕 辛酉（12日）、**攸之**は輔國將軍の**孫同等**を遣わして相い繼いで東下せしむ。**攸之**は**道成**に書を遣わして、以て為す、

「**少帝**が昏狂ならば、宜しく諸公と密議し、共に**太后**に白し、下令して之を廢すべし。奈何して左右に交結し、親ら弑逆を行い、乃ち殞せずして、流蟲は戸に在るに至るや？凡そ臣下に在りては、誰か惋駭せずや！又た、朝舊（朝廷の旧臣）を移易し、親黨を佈置し、宮閣の^{かんぎく}管籥（穴の空いた竹笛）は、悉く家人に關す。吾は知らず**子孟**（**霍光**）、**孔明**の遺訓^{まこと}は固に此くの如く乎！足下は既に宋を賊する之心有り、吾は寧ぞ敢えて包胥（申包胥が秦の帥を乞いて楚を存すると左傳にあり）之節^すを捐てん邪！」

朝廷は之を聞き、恟懼す。

■ 〔道成迎撃態勢〕 丁卯（18日）、**道成**は入りて朝堂を守り、侍中の**蕭嶷**に命じて代わりて東府に鎮ぜしめ、撫軍行參軍の**蕭映**を京口に鎮す。**映**は、**嶷**之弟也。戊辰（19日）、内外は纂嚴す。己巳（20日）、郢州刺史の武陵王の**贊**を以て荊州刺史と為す。庚午（21日）、右衛將軍の**黃回**を以て郢州刺史と為し、前鋒の諸軍を督して以て**攸之**を討たしむ。

■ 「道成は世子の蹟を尋陽に送り込む」 初め、道成は世子（桂陽の難を平らげ爵県公に進められ世子とす）の蹟^{さく}を以て晉熙王の變（続は下が火の漢字）の長史，行郢州事と為し，器械を修治し以て攸之に備えしむ。變を征（続は徴）して揚州と為すに及び，蹟を以て左衛將軍と為し，變と俱に下らしむ。劉懷珍は道成に於いて言つて曰く、

「夏口は衝要にして、宜しく其の人を得るべし。」

道成は蹟に書を與えて曰く、

「汝は既に入朝す、當に文武兼ね資し汝の意と合う者を須^{もち}い、委ねるに後事を以てすべし。」

蹟は乃ち變の司馬の柳世隆を薦して自ら代わらしむ。道成は世隆を以て武陵王の贊の長史と為し、郢州の事を行わしむ。蹟は將に行かんとし、世隆に謂つて曰く、

「攸之は一旦變を為し、(8-113p)夏口の舟艦を焚きて、流れに沿いて而して東すれば、制す可からざる也。若し攸之の留まりて郢城を攻むるを得れば、必ず未だ猝^{にわか}に抜く能わず。君は其の内と為り、我は其の外と為せば、之を破るは必ず矣。」

攸之が兵を起こすに及び、蹟は行きて尋陽に至り、未だ朝廷の處分を得ず、衆は道を倍して建康に趨かんと欲す、蹟は曰く、

「尋陽の地は中流に居り、畿甸^{きでん}（直轄領）に密邇^{みつじ}す。若し留まりて湓口に屯すれば、内は朝廷を籓し、外は夏の首を援け、形勝を保障し、西南を控制せん、今日は此に會するは、天の置く所也。」

或るひとは、

「湓口の城は小さく固め難し」

と以て為し、左中郎將の周山圖は曰く、

「今中流に據りて、四方の勢援を為すは、小事を以て之を難じる可からず。苟しくも衆心は齊一なれば、江山は皆な城隍也。」

庚午（21日）、蹟は變を奉じて湓口^{ほんこう}（江西省尋陽道德化県、現・九江市柴桑区）に鎮す。蹟は悉く事を以て山圖に委ねる。山圖は行旅の船の板を斷ち取りて以て樓櫓^{ろうろ}を造り、水柵を立て、旬日にして皆な辦^{べん}（処理）ず。道成は之を聞き、喜んで曰く、

「蹟は真に我が子也！」

蹟を以て西討都督と為す。蹟は山圖を啟して軍副と為す。時に江州刺史の邵陵王の友は尋陽に鎮し、蹟は「尋陽城は固まるに足らず」

と以て為し、表して友を移し同じく湓口に鎮ぜしめ、江州の別駕の豫章の胡諧之を留めて尋陽を守らしむ。

■ 「湘州刺史の王蘊」 湘州刺史の王蘊は母の喪に遭いて罷めて歸り、巴陵（湖南省武陵道岳陽県、現・岳陽市岳陽県）に至り、沈攸之と深く相い結ぶ。時に攸之は未だ兵を擧げず、蘊は郢州を過ぎ、蕭蹟が出でて吊（続は弔）うに因りて難を作し（命を狙う）、郢城に據らんと欲す。蹟は之を知り、出でず。還りて、東府に至り、又た蕭道成が出でて吊（続は弔）うに因りて難を作さんと欲し、道成は又た出でず。蘊は乃ち袁粲、劉秉とは密かに道成を誅せんと謀り、將帥の黃回、任侯伯、孫曇瓘、王宜興、卜伯興等は皆な與に通謀す。伯興は、天與（卜天與は劭の乱に死す）之子也。

【建康の袁粲の内応鎮圧】

■ 「道成と粲」 道成は初め攸之の事起こるを聞き、自ら往きて粲に詣り、粲は辭して見みえず。通直郎（通直散騎侍郎。晉武帝は員外散騎侍郎を置き、元帝泰興二年二人をして直せしむ）の袁達^{えんたつ}は粲に謂う、

「宜しく異同を示すべからず」

粲は曰く、

「彼は若し主幼に時艱^{かん}なること、桂陽と時（桂陽王休範の反乱）に異ならざるを以て、我を劫^{おびや}かして台（続は臺）に入れば、我は何んの辭ありてか以て之を拒まん！一朝同じく止まれば、異ならんと欲すとも得ん乎！」

道成は乃ち（袁粲の料る如く）楮淵を召して、之と與に席を連ね、事毎に必らず淵を引いて之と共にす。時に劉韞は領軍將軍^な為り、入りて門下省に直す。ト伯興は直閣^た為り、黃回等の諸將は皆な出でて新亭に屯す。

■〔楮淵は袁粲の謀を道成に密告〕初め、楮淵は衛將軍と為り、母の憂に遭って職を去り、朝廷は敦く迫るも、起たず。粲は素より重名有り、自ら往きて譬說^{ひげい}（説論）し、淵は乃ち之に従う。粲が尚書令に為るに及び、母の憂に遭い、淵は譬說^{ひげい}して懇^{ねんご}ろに至れども、粲は遂に起たず、淵は是に由りて是を恨む。沈攸之の事起こすに及び、道成は淵と之を議す。淵は曰く、

「西夏は冚^{きん}（きざし）難は、事は必ず成る無く、（8-114p）公は當に先ず其の内（袁粲等）に備えるべき耳。」

粲は謀りて既に定まり、將に以て淵に告げんとす。衆は

「淵と道成は素より善し、告げる可からず。」

と謂い、粲は曰く、

「淵と彼は善しと雖も、豈に大いに同異^なを作す容けんや！今若し告げざれば、事は定まりて便ち應に之を除くべし。」

乃ち謀を以て淵に告げ、淵は即ち以て道成に告げる。

■〔道成の防衛体制構築〕道成も亦た先に其の謀を聞き軍主の蘇烈、薛淵、太原王の天生を遣わして兵を將いて、粲を助けて石頭を守らしむ。薛淵は固辭し、道成は之を強い、淵は已むを得ず、涕泣して拜辭し、道成は曰く、

「卿は近く石頭に在り、日に夕に去來し、何の是の如く悲しみ、且つ又た何んぞ辭するや？」

淵は曰く、

「公が能く袁公を保ちて共に一家と為るや否やを審かにせずや？今淵が往けば、之と同じくすれば則ち公に負^{そむ}き、同ぜざれば則ち立ちどころに禍を受けん、何ぞ悲しまざるを得るんや！」

道成は曰く、

「卿を遣わす所以は、正に能く事に臨む之宜しきを盡くし、我をして西を顧みる之憂いなから使むるが為なる耳。但だ當に努力して、多言する所無し。」

淵は、安都之從子也。道成は又た驍騎將軍の王敬則を以て直閣と為し、伯興と共に禁兵を總ぜしむ。

■〔建康と石頭の大混乱〕粲は太后令を矯め、韞、伯興をして宿衛兵を帥いて朝堂に道成を攻め使め、回等をして所領を帥いて應を為さしめ、劉秉、任侯伯等は並んで石頭に赴かしめんと謀る、本々は壬申（23日）の夜に發せんと期す。秉は恒擾して為す所を知らず、晡の後即ち束裝す。去るに臨み、糞^{あつもの}を啖り、胸上に寫^{そぞ}ぎ、手が振（震）いて自ら禁ぜず。未だ暗からず、婦女を載せ、室を盡くして石頭に奔り、部曲は數百、赫奕^{かくえき}（盛ん）として道に滿つ。既に至り、粲を見、粲は驚いて曰く、

「何事が遽^{にわか}に來たるか？今は敗れるか矣！」（事が大きく顛われたと認識）

秉は曰く、

「公を見るを得、萬死するも何を恨まんか！」

孫曇瓘は之を聞き、亦た石頭に奔る。丹陽丞の王遜等は走りて道成に告げ、事は乃ち大きく露わる。遜は、僧綽（元嘉の末の臣）之子也。

道成は密かに人をして王敬則に告げ使める。時に閤は已に閉まり、敬則は開いて閤より出んと欲す、ト伯興は兵を嚴にして備えを為し、敬則は乃ちを止まる所の屋壁を鋸して、出でるを得、中書省に至りて輜を收めんとす。輜は已に嚴（武装）を成し、列燭して自ら照らす。敬則が猝かに至りるを見て、驚いて起ちて之を迎え、曰く、

「兄は何ぞ能く夜顧みるや？」

敬則は之を呵して曰く、

「小子は那ぞ敢えて賊を作すや！」

輜は敬則を抱き、敬則は拳で其の頬を毆って地に仆して而して之を殺し、又た伯興を殺す。蘇烈等は倉城（石頭）に據りて桒を拒む。王蘊は秉の已に走るを聞き、歎じて曰く、

「事は成らずか矣！」

と狼狽して部曲數百を帥いて石頭に向かう。本は南門を開かんと期す、時に暗夜にして、薛淵は門に據りて之を射る。蘊は桒の已に敗れると謂い、即ち散り走る。

■ 〔桒の父と子の憤死を哀れむ〕 道成は軍主の會稽の戴僧靜を遣わして數百人を帥いて石頭に向かい烈等を助けしめ、倉門より入るを得、之と與に並びて桒を力攻す。孫曇瓘は驍勇にして善戦し、台軍の死者は百餘人。王天生は殊に死戦し、故に相い持つを得、(8-115p) 亥より丑に至り、戴僧靜は兵を分けて府の西門を攻め、之を焚き、桒と秉は城の東門に在り、火の起こるを見、還りて府に赴かんと欲す。秉は二子の俛、陔と城を逾えて走る。桒は城を下り、烈燭して自ら照らし、其の子の最に謂って曰く、

「本より一木の大廈之崩れるを止める能わざるを知る、但だ名義を以て此くに至る耳。」

僧靜は暗に乗りて城を逾えて獨り進み、最是異人有るを覺り、身を以て桒を衛り、僧靜は直ちに前んで之を斫る。桒は最に謂って曰く、

「我は忠臣たるを失わず、汝は孝子たるを失わず！」

遂に父子俱に死す。百姓は之を哀れみ、之が為に謠って曰く、

「憐れむ可し石頭城、寧ろ袁桒と為りて死するとも、褚淵と作りて生きずや！」

劉秉の父子は走りて額簷湖に至り、追いて執えて、之を斬る。任侯伯等は並びて船に乗りて石頭に赴き、既に至れば、台軍は已に集まり、入るを得ず、乃ち馳せ還る。

■ 〔建康の戦後処理は穩便〕 黃回は兵を嚴にして、詰旦（早朝）を期して所領を帥いて御道に従いて直に台門に向かい道成を攻めんとす。事洩れるを聞き、敢えて發せず。道成は之を撫でて舊の如し。王蘊、孫曇瓘は皆な逃竄し、先ず蘊を捕え得て、之を斬り、其餘の桒の黨は皆な問う所無し。

■ 桒の典籤の莫嗣祖は桒、秉の為に宣しく密謀を通じ、道成は召して之を詰りて曰く、
「袁桒は反を謀るに、何ぞ敢聞せざるや？」

嗣祖は曰く、

「小人は識る無く、但だ恩に報いるを知るのみ、何の敢えて其の大事を洩らすや！今袁公は已に死し、義として生を求めず。」

蘊の嬖人の張承伯は蘊を藏匿し、道成は並びて赦して而して之を用いる。（蕭道成は怨みをよく自制）

■ 〔袁桒の人となり〕 桒は簡淡平素に、而して經世之才無し。飲酒を好み、吟諷を喜び、身は劇任に居れども、肯えて事に當たらず。（尚書省の）主事が往きて咨決する毎に、或は高詠して之に對える。閒居高臥し、門は雜賓無く、物情に接せず、故に敗に及ぶ。

■ 〔袁桒は匹夫にして棟樑にあらず〕 裴子野は論して曰く、袁景倩（字）は、民望國華にして、付託之重

きを受ける。智は以て奸を除くに足らず、權は以て變に處するに足らず、蕭條として散落し、危けれども而して扶けず。九鼎は既に軽く、三才は將に換わらんとするに及び、區區たる斗城（小さい城）之裡に、萬死に出でて而も辭せず、蓋し匹夫之節を蹈み、而も棟樑之具無きかな矣！

■甲戌（25日）、大赦す。

■乙亥（26日）、尚書僕射の**王僧虔**を以て左僕射と為し、新たに中書令の**王延之**を除して右僕射と為し、度支尚書の**張岱**を吏部尚書と為し、吏部尚書の**王奐**を丹陽尹と為す。**延之**は、**裕**之孫也。

■**[張瑰は吳郡太守劉遐を討ち取る]**劉秉の弟の**遐**は吳郡太守たみ為り。司徒右長史の**張瑰**は、**永**（文文明三帝に歴事）之子也、父の喪に遭いて吳に在り、家は素より豪盛にして、**蕭道成**は**瑰**をして間を伺いて**遐**を取ら使む。會々**遐**は**瑰**を召し府に詣らしめ、**瑰**は部曲十餘人を帥いて直ちに齋中に入り、**遐**を執り、之を斬り、郡中に敢えて動く莫し。**道成**は之を聞き、以て**瑰**の從父の領軍の**沖**に告げ、**沖**は曰く、

「**瑰**は百口を以て一擲して、手を出して盧（チョボの盧）を得る矣。」

道成は即ち**瑰**を以て吳郡太守と為す。

■**[道成は黃回を警戒して腹心で固める]****道成**は移りて閔武堂に屯し、猶ほ重兵を以て**黃回**に付して西上せ使め、（8-116p）而して（警戒して）腹心を以て配す。**回**は素より**王宜興**と協せず、**宜興**の反きて其の謀を告げるを恐れ、**閏月（12月）**、辛巳（2日）、事に因りて**宜興**を収めて、之を斬る。諸將は皆な言わく、

「**回**は強兵を握る、必らず反す」

寧朔將軍の**桓康**は獨り往きて之を刺さんと請い、**道成**は曰く、

「卿等は何を疑うか！彼は能く為す無き也。」（**蕭道成**の度量の大きさを示す）

【沈攸之の東征】

■**[沈攸之の東征軍は郢城に到達]****沈攸之**は中兵參軍の**孫同等**の五將を遣わして三萬人を以て前驅と為さしめ、司馬の**劉攘兵**等五將は二萬人を以て之に次がしむ。又た中兵參軍の**王靈秀**等四將を遣わして兵を分け夏口に出で、魯山に據らしむ。癸巳（14日）、**攸之**は夏口に至り、自ら兵の強きを恃み、驕色有り。郢城は弱小にして、攻めるに足らずと以てし、云く、

「**安西**（**武陵王贇**は**安西**將軍を以て郢に鎮す）を問訊し、暫く**黄金浦**（湖北省江漢道武昌縣西南の鸚鵡洲上、武漢市江夏区）に泊さんと欲す」

人を遣わして**柳世隆**に告げて曰く、

「太后令を被り、當に暫く都に還らん。卿は既に相い與に國に奉じる、想うに此の意を得ん。」

世隆は曰く、

「東下之師は、久しく聲問（世間の風聞）を承ける。郢城は小鎮、自ら守る而して已のみ。」

宗儼之は**攸之**に郢城を攻めるを勧める。**臧寅**は以て為す、

「郢城の兵は少なしと雖も而して地は險しく、攻守の勢いは異に、旬日にして抜く可くには非ず。若し時に擧げ（抜く）ざれば、鋭を挫いて威は損す、今は流れに順いて長驅すれば、日を計りて捷つ可し。既に根本を傾ければ、則ち（つ續はなし）郢城は豈に能く自ら固めるや！」

攸之は其の計に従い、偏師を留めて郢城を守らしめ、自ら大衆を將いて東に下すらんと欲す。

■**[柳世隆は沈攸之に挑戦]**乙未（16日）、將に發し、**柳世隆**は人を遣わして西渚（鸚鵡州）に於いて挑戦せしめ、前軍中兵參軍の**焦度**は城樓上に於いて言を肆つらねて**攸之**に罵ののしり、且つ之を穢辱す。**攸之**は怒り、計を改めて城を攻め、諸軍をして岸に登ら令め郭邑を焼き、長圍を築き、晝夜攻戦す。**世隆**は宜に隨いて

應を拒み、**攸之**は克つ能わず。**道成**は吳興太守の**沈文秀**に命じて吳、錢唐の軍事を督さしむ。**文秀**は**攸之**の弟の新安太守の**登之**を収めて、其の宗族を誅す。(沈文秀は父慶之の仇を討つ)

■乙未（16日）、後軍將軍の**楊運長**を以て宣城太守と為す。是に於いて**太宗**の嬖臣の禁省に在る者無き矣。

■**沈約**は論じて曰く、「夫れ人君は南面し、九重に奥は絶し、朝夕に陪奉し、義は卿士を隔つ。階闥(宮中)之任は、宜しく有司は存すべし。既に而して恩は狎(慣れ)を以て生じ、信は恩に由りて固く、憚る可くの姿は無く、親しみ易き之色有り。孝建、泰始には、主の威は獨り運び、而して刑政は糾雜し、理は遍ねく通じ難し。耳目の寄る所、事は近習に歸す。歡慍(恨み)を覘い、慘舒を候うに及び、動は主情に中たり、舉は旨に謬う無し。人主は其の身は卑しく位の薄きを謂い、以て權の重たきを得ずと為す。曾ち鼠は社に憑りて(漢の中山靖王勝は曰く、社鼠は熏べられざるは託す所の者然ればなり)貴く、狐は虎を藉りて威あるを知らず(楚の江乙の言、虎の威を借りて百獸を走らせた狐の逸話)、(8-117p)外は主に逼る之嫌は無く、内は專用之效は有り、勢は天下を傾けれども、未だ之れ或いは悟らず。**太宗**の晩運(晩年)、盛衰を経るを慮るに及び、權幸之徒は、宗威を懼(続は懼)憚(畏れ憚る)し、幼主を孤立せ使しめ、永く國權を竊まんと欲し、同異を構造し、禍隙を興樹し、帝弟宗王は、相繼ぎて屠戮せられ、寶祚(皇位)は夙(つと)に傾くは、實に此くに由る矣。」

■**蕭道成**に**黃鉞** 辛丑（22日）、尚書左丞の濟陽の**江淹**は建議して**蕭道成**に**黃鉞**を假す、之に従う。

■北秦州刺史の武都王の**楊文度**に都督北秦、雍二州諸軍事を加え、龍驤將軍の**楊文弘**を以て略陽太守と為す。

●壬寅（23日）、魏の**皮歡喜**は葭蘆を抜き、**文度**を斬り。魏は**楊難當**の族弟の**廣香**を以て陰平公、葭蘆戍主と為し、用(+仍)いて**歡喜**に詔して駱谷城を築かしむ。**文弘**は表を奉じて魏に謝罪(+なし)し、子の**苟奴**を遣わして入りて侍さしむ。魏は**文弘**を以て南秦州刺史、武都王と為す。

■**江淹**の**蕭道成人物評価** 乙巳（26日）、**蕭道成**(驃騎大將軍)は出でて新亭に頓し、驃騎參軍の**江淹**に謂って曰く、

「天下紛紛とし、君は何如と謂うか？」

淹は曰く、

「成敗は德に在り、衆寡に在らず。公は雄武にして奇略有り、一の勝也。寛容に而して仁恕なり、二の勝也。賢能が畢力(力を尽くす)すは、三の勝也。民の望む所に歸すは、四の勝也。天子を奉じて以て叛逆を伐つは、五の勝也。彼は志の鋭に而して器の小なるは、一の敗也。威有りて而して恩無しは、二の敗也。士卒の解體すは、三の敗也。搢紳(笏・しゃくを紳・おおおびに搢・はさむ者、身分の高い人)懷かしまらずは、四の敗也。懸兵數千里、而して同惡相い濟う無し、五の敗也。豺狼十萬と雖も、終に我の獲る所と為らん。」

道成は笑いて曰く、

「君の談は過ぎるかな矣！」

南徐州行事の**劉善明**は**道成**に言つて曰く、

「**攸之**は衆を収め騎を聚め、舟を造り械を治め、禍心を苞藏すること、今に於いて十年(明帝泰始五年に郢州刺史)なり。性は既に險躁、才は持重するに非らず。而して逆を起こして累旬、遲回して進まず。一には則ち兵機に暗く、二には則ち人情は離れ怨み、三には則ち掣肘之患有り、四に則ち天は其の魄(魂)を奪う。本は其の剽勇輕速にして、未だ備えざるを掩襲し、一戰に於いて決すを慮る。今六師は齊しく奮い、諸侯は同舉す、此くは籠中之鳥なる耳！」

蕭贍は周山圖に**攸之**を問ひ、**山圖**は曰く、

「**攸之**は相い與に郷に鄰し（攸之は吳興の人、山圖は義興の人）、數々共に征伐し、頗る其の人と為りを悉せり、性度は險を刻み、士心は附かず、今兵を堅城之下に頓し、^{たまたま}適に以て離散之漸を為す所耳。」

蒼梧王_下升明二年（戊午、478年）

■**春、正月**，巳酉（1日）朔，百官は戎服して入朝す。

■**〔沈攸之の郢城攻め〕** 沈攸之は銳を盡くして郢城を攻め、柳世隆は間に乗りて屢々之を破る。蕭贇は軍主の桓敬等を遣わして軍を入れて西塞（湖北省江漢道鄂城縣東130里の山、現・鄂州市鄂城区）に據り、世隆の聲援と為さしむ。

■攸之は郢府の法曹の南郷の范雲を獲り、書を送りて入城せしめ、武陵王の贊に犢一腔、柳世隆に魚三十尾を餉りて、(8-118p)皆な其の首を去る。城中は之を殺さんと欲し、雲は曰く、

「老母弱弟は、沈氏に命を懸け、若し其の命に違えば、禍は必ず親に及ぶ。今日は戮に就くは、甘心すること^{なすな}齊の如し。」（詩の谷風に、「誰か茶を苦しと謂う、其の甘きこと齊の如し」、甘心して死につくことは齊を食らう如しの意味）乃ち之を赦す。

■攸之は其の將の皇甫仲賢を遣わして武昌に向わしめ、中兵參軍の公孫方平をして西陽に向わしむ。武昌太守の臧渙は攸之に降り、西陽太守の王統は湓城に奔る。方平は西陽に據り、豫州刺史の劉懷珍は建寧太守の張謨等を遣わし、萬人を將いて之を撃たしむ。辛酉（13日）、方平は敗走す。平西將軍の黃回等の軍は西陽に至り、流れに溯りて而して進む。

■**〔沈攸之の軍の逃亡者相次ぐ〕** 攸之は素より人情を失い、但だ威力を以て^{おびや}劫かす。初め江陵を發するや、日（統は巳）に逃げる者有り。郢城を攻め、三十餘日拔かざるに及びて、逃げる者は稍々多し。攸之は日に夕に乘馬して營を歴て撫慰し、而るに去る者は息まず。攸之は大いに怒り、諸軍主を召して曰く、「我は太后令を被り、義を建て都に下る。大事若し克てば、白紗帽は共に著ける耳。其の振わざる如きは、朝廷は自ら我が百口を誅し、餘人に關せず。^{このごろ}比の軍人の叛散するは、皆な卿等を以て意と為さず。我も亦た叛身を問う能わず、今より軍中の叛者有れば、軍主は其の罪に任ずべし。」

是に於いて一人叛けば、人を遣わして之を追わしめ、亦た去りて返らず、敢えて發覺する莫く、鹹な異計有り。

■**〔沈攸之の軍の江陵逃亡〕** 劉懷兵は書を射て城に入れて降を請い、柳世隆は開門して之を納れる。

丁卯（19日）夜、懷兵は營を焼いて而して去る。軍中は火の起こるを見、爭い甲を棄てて走り、將帥は禁ずる能わず。攸之は之を聞き、怒り、^{ひげ}須を^{ふく}銜みて之を^か咀み、懷兵の兄の子の天賜、女婿の張平を収めて虜とし、之を斬る。旦に向かい、攸之は衆を帥いて江を過ぎ、魯山（大別山、湖北省江漢道漢陽縣の東北、江と漢水の交点、現・武漢市漢陽区）に至り、軍は遂に大きく散じ、諸將は皆な走る。臧寅は曰く、

「其の成るを^{こいねが}幸い而して其の敗るを棄てるは、吾は為すに忍ばざる也！」

乃ち水に投げて死す。攸之は猶ほ數十騎有りて自ら隨い、軍中に宣令して曰く、

「荊州の城中には大いに錢有り、相い與に還り、取りて以て資糧と為す可し。」

郢城は未だ追軍有らず、而るに散軍は^{ばんしやう}蠻抄（落ち武者狩りか?）を畏れ、更に相い聚結し、二萬人になる可くか、攸之に隨いて江陵に還る。

■**〔張敬兒は江陵を襲い、瓦解〕** 張敬兒は既に攸之の使者を斬り、即ち兵を勒す。攸之の下るを偵（偵察）し、遂に江陵を襲う。攸之は子の元琰をして兼長史の江乂、別駕の傅宣を共に江陵城を守らしむ。敬兒は

沙橋に至り、觀望して未だ進まず。城中は夜は鶴唳を聞き、軍來ると為すと謂い、乂、宣は開門して出走し、吏民は崩潰す。元琰は龍洲（樂郷に近し）に奔り、人の殺す所と為る。敬兒は江陵に至り、攸之の二子、四孫を誅す。

■ 〔沈攸之の縊死〕 攸之は將に江陵に至らんとし、百餘里にして、城の已に敬兒の據る所と為るを聞き、士卒の之に隨う者は皆な散ず。攸之は歸る所無く、其の子の文和と走りて華容の界に至り、皆な櫟林にて縊る。己巳（21日）、村民は首を斬りて江陵に送る。敬兒は楯を以て之を撃げ、(8-119p) 青絲を以て覆い、諸を市郭に徇え、乃ち建康に送る。敬兒は攸之の親黨を誅し、其の財物數十萬を収め、皆な以て私に入れる。

■ 〔邊榮と客の邕之の死〕 初め、倉曹參軍の金城の邊榮は、府錄事の辱める所と為り、攸之は榮の為に録事を鞭殺す。敬兒の將に至らんとするに及び、榮は留府司馬為り、或は之を説いて敬兒に詣りて降ら使む、榮は曰く、

「沈公の厚恩を受け、此くの如く大事を共にし、一朝緩急あり、便ち本心を易えるは、吾は能わざる也！」
城は潰え、軍士は執りて以て敬兒を見る、敬兒は曰く、

「邊公は何んぞ早く來ずや！」

榮は曰く、

「沈公は留まりて城を守らしめ（続の表現採用）、委て去るに忍びず。本より生を祈（求める）らず、何ぞ須らく問わ見るや！」

敬兒は曰く、

「死するは何ぞ得難きか！」

命じて之を斬らしむ。榮は歡笑して而して去る。榮の客の太山の程邕之は榮を抱いて曰く、

「邊公と周遊し、邊公の死を見るに忍びず、先に殺され見るを乞う。」

兵人は戮を行うを得ず、以て敬兒に白し、敬兒は曰く、

「死を求むるは甚だ易く、何為れぞ許さざるか！」

先ず邕之を殺し、然る後に榮に及び、軍人は泣を垂れざる莫し。孫同（軍鋒）、宗儼之（攸之に蜂起を勧める）等は皆な伏して誅す。

■ 〔戒嚴令解除と蕭道成の実権掌握〕 丙子（28日）、嚴を解き、侍中の柳世隆を以て尚書右僕射と為し、蕭道成は鎮東府に還る。丁丑（29日）、左衛將軍の蕭贍を以て江州刺史と為し、侍中の蕭嶷を中領軍と為す。二月、庚辰（2日）、尚書左僕射の王僧虔を以て尚書令と為し、右僕射の王延之を左僕射と為す。癸未（5日）、蕭道成に太尉、都督南徐等十六州諸軍事を加え、衛將軍の褚淵を以て中書監、司空と為す。道成は表（上流既に定まるを以て表す）して黃鉞を送る。吏部郎の王儉は、僧綽之子也、神彩にして淵曠、學を好み博聞、少くして宰相之志有り、時論は亦た推して之を許す。道成は儉を以て太尉右長史（太尉府には特に左右長史を置く）と為し、待遇は隆密にして、事は大小と無く之に専ら委ねる。

● 丁亥（9日）、魏主は代の湯泉に如く。癸卯（25日）、還る。宕昌王の彌機（梁彌機、?-485）は初めて立つ。（宕昌羌、羌族政權。都城は宕昌城、現・甘肅省隴南市宕昌県の西。首長姓は梁）

● 三月、丙子（29日）、魏は遣使して彌機を拜して征南大將軍、梁、益二州牧、河南公、宕昌王とす。黃回は郢州に在りて樂しまず、固く南亮を求め、遂に部曲を帥いて輒ち還る（刃が頸にあるに乃ち東に帰るは死すなわ）

を送るなり)。辛卯（46日?）、都督南兖等五州諸軍事、南兖州刺史に改める。

■ 〔任侯伯の誅殺〕 初め、王蘊は湘州を去り、湘州刺史の南陽王の翽（明帝の子）は未だ鎮に之かず、長沙内史の庾佩玉は府事に行く。翽は先に中兵參軍の韓幼宗を遣わして兵を將いて湘州に成せしめ、佩玉と相い能からず。沈攸之の反するに及び、兩人は互いに相い疑い、佩玉は襲いて幼宗を殺す。黄回は郢州に至り輔國將軍の任侯伯を遣わして湘州の事を行わしむ。侯伯（黄回と同じく袁劉と謀る）は輒ち佩玉を殺して、以て自ら免れんことを冀^{こいねが}う。湘州刺史の呂安國之鎮するや、蕭道成は安國をして侯伯を誅せ使む。

●夏，四月，甲申（7日），魏主は崱山に如く。丁亥（10日），還る。（8-120p）

■ 〔蕭道成は遂に黄回の誅殺で敵対勢力掃討〕 蕭道成は以えらく黄回は終に禍亂を為さんと。回には部曲數千人有り、（人々を）遣りて收めしめん欲せば、亂を為すを恐れる。辛卯（14日）、回を召して東府に入らしむ。至れば、外齋に停め、桓康をして數十人を將い、回の罪を數えて而して之、並びに其の子の竟陵の相の僧念を殺さ使む。（蕭道成は既に反対者全滅の方針に転換）

■ 〔京邑周辺の支配強化〕 甲午（17日）、淮南、宣城二郡（京邑に近く他人に任せず）太守の蕭映を以て南兖州の事を行わしめ、仍って其の弟の晃を以て之に代える。

● 〔魏の婚姻制度改革〕 五月，魏は皇族、貴戚及び士民之家の氏族を顧みざりて、下は非類と婚偶するを禁ず。犯す者は制に違えるを以て論ず。

● 〔玉座に虎〕 魏主は太后と與に虎圈に臨み、虎は有りて逸し、閣道に登り、幾んど御座に至らんとし、侍衛は皆な驚き靡く。吏部尚書の王叡は戟を執り之を御り、（馮）太后は稱して以て忠と為し、親任すること愈々重し。

■六月，丁酉（21日）、輔國將軍の楊文弘を以て北秦州刺史、武都王と為す。

●庚子（24日）、魏の皇叔の若は卒す。

■ 〔蕭道成は二尚方を廃止〕 蕭道成は大明以來、公私は奢侈なるを以て、秋，八月，奏して御府（漢以來あり、宋紀によると世祖大明四年に細作署令を改めて左右御府令とす）を罷め、二尚方（宮廷工房）の雕飾器玩（豪華な彫物工芸裝飾容器）を省く。辛卯（16日）、又た奏して民間の華偽の雜事（続は物）を禁ず、凡そ十七條。

■乙未（20日）、蕭蹟を以て領軍將軍と為し、蕭嶷を江州刺史と為す。

■九月，乙巳（1日）朔、日に之食有り。

■ 〔蕭道成の大業への野望〕 蕭道成は時の賢を引きて大業に參贊せしめんと欲し、夜、驃騎長史の謝朓を召し、人を屏けて與に語り、之久しく、朓は言無し。唯だ二小兒は燭を促（続は捉）し、道成は朓が之を難じるを慮りて、仍って燭を取りて兒を遣り、朓は又た言無し。道成は乃ち左右を呼ぶ。朓は、莊（謝莊は130卷明帝泰始元年に見える、道政は驃騎大將軍の長史とし、その府の長官）之子也。

■ 〔王儉の助言〕 太尉右長史の王儉は其の指^{むね}を知り、它日、道成に於いて間を請いて言つて曰く、「功は高くして賞せられざるは、古今に一に非らず。公の今日の位地を以て、北面に終わらんと欲すは、可なるか乎？」

道成は正色して之を裁し、而るに神采^{しんさい}（顔つき）は内に和らぐ。儉は因りて曰く、

「儉は公の殊に眄（眺）めるを蒙り、吐き難き所を吐く所以なり。何ぞ拒むを賜わる之深きや！宋氏は徳を失い、公に非らずんば豈に復た寧ぞ濟さんや！但だ人情は澆薄にして久しく持する能わず。公が若し小さく復た推遷するならば、則ち人望は去らん矣。豈に唯だ大業の永く淪^{しず}（さざ波）むのみ、七尺（の身体）

も亦た保ち得る可からずや。」

道成は曰く、

「卿の言は無理ならず。」

儉は曰く、

「公の今の名位は、故^{まこと}に是れ經常の宰相にして、宜しく禮群后を絶ち、微^{かすか}に變革を示すべし。當に先ず楮公をして之を知ら令め、儉は命を銜（含む）むを請う。」

道成は曰く、

「我は當に自ら往かん。」

少日を経て（数日後）、道成は自ら楮淵^{いた}に造り、款言^{ひかげ}して晷^{ひかげ}を移し、乃ち謂って曰く、

「我の夢は應に官を得る（皇帝に即位する）べし。」

淵は曰く、(8-121p)

「今は授る（方に大尉都督を加えられし）こと始めて爾^{しかり}、一二年間は未だ容れるに便ち移らざらんを恐れる。且つ吉夢は未だ必らずも應に旦夕に在るべからざらん。」

道成は還り、以て儉に告ぐ。儉は曰く、

「楮は是れ未だ理を達せざる耳。」

儉は乃ち道成に太傅を加え、黃鉞を假す議を唱え、中書舍人の虞整をして詔を作ら使む。

■道成の親しき所の任遐は曰く、

「此くは大事なり、應に楮公に報ずべし。」

道成は曰く、

「楮公が従わずんば、奈何せんか？」

遐は曰く、

「彦回（楮淵の字）は身を惜しみ妻子を保たんとし、奇才異節は有るに非ず、遐は能く之を制す。」

淵は果たして違異無し。

■蕭道成に九爵を賜る 丙午（2日）、詔して道成に黃鉞を假し、大都督中外諸軍事、太傅、領揚州牧に進め、劍を履きて殿に上り、入朝に趨らず、贊拜に名のらせず、使持節、太尉、驃騎大將軍、錄尚書、南徐州刺史は故の如し。道成は殊禮（上記特別の礼）を固辭す。

■揚州刺史の晉熙王の燮を以て司徒と為す。

■戊申（4日）、太傅の道成は蕭映を以て南兗州刺史と為す。

■冬、十月、丁丑（3日）、蕭晃を以て豫州刺史と為す。

■己卯（25日）、孫曇瓘（石頭の乱に逃亡）を獲えて、之を殺す。

■魏の員外散騎常侍の鄭羲は來聘す。

■壬寅（28日）、皇后の謝氏を立てる。后は、莊之孫也。

■十一月、癸亥（20日）、臨澧（湖南省武陵道安福県、現・常德市臨澧県）侯の劉晃は謀反に坐し、其の黨と與に皆な伏して誅す。晃は、秉之從子也。

■甲子（21日）、南陽王の翽を徙して隨郡王と為す。

●魏の馮太后の圧政 魏の馮太后は青州刺史の南郡王の李惠（高祖の母は惠の娘）を忌んで、誣^しいて「惠は將に南に叛かんとす」

と雲う。十二月，癸巳（20日），惠及び妻並びに其の子弟を誅す。太后は猜嫌を以て夷滅する所の者は十餘家，而して惠の歴（任）する所は皆な善政有り，魏人は尤も冤（濡れ衣）として之を惜しむ。

■ 〔朝廷の禮樂の改革〕 尚書令の王僧虔は奏す、

「朝廷の禮樂は，多く正典と違えるを以てす。大明中に即ち宮縣を以て鞞（大鼓と舞）拂（拂子を持つ舞）合い和す，節數（音樂の変調）は會うと雖も，雅體（雅正なる體裁）に乖くを慮る。又た，今之清商（五音の一つで、清く澄んだ商の音、清商令を置く），實は銅爵（魏の太祖は銅爵臺を鄴に置き、自ら樂符を作り管弦す）に由り，三祖（太祖・高祖・烈祖）の風流，遺音は耳を盈（満）たし，京、洛は相い高く，江左（揚子江の左岸、南岸）は彌々貴く，中庸和雅なること，斯より近くは莫し。而るに情は變わり聽くに移り，稍々復た銷落し，十數年間，亡ぶ者は將に半ばし，民間は競いて新聲雜曲を造り，煩淫は極まり無し。宜しく有司に命じて悉く補綴を加えしむるべし。」

朝廷は之に従う。

●是の歲，魏の懷州刺史の高允は老疾を以て告げて郷里に歸り，尋ぎて復た安車を以て征（統は徴）して平城に至り，（8-122p）鎮軍大將軍、中書監を拜す。固辭し，許さず。乗車して入殿し，朝賀を拜さざらしむ。

参考 478年・（「宋書」倭王武・雄略天皇の上表文）

「順帝の昇明二年、使を遣わして上表して曰く、『封国は偏遠にして、藩を外に作す。昔より祖禰躬ら甲冑をつらぬき、山川を跋涉し寧処に違（いとま）あらず。東は毛人を征すること五十五国、西は衆夷を服すること六十六国、渡りて海北を平ぐること九十五国、王道融泰にして、土を廓き、畿を遐にす。累葉朝宗して歳に愆ず。臣、下愚なりといえども、忝（かたじけな）くも先緒を胤ぎ、統ぶる所を驅率し、天極に帰崇し、道は百済を遙て、船舫を装治す。しかるに句麗無道にして、図りて見吞せんと欲し、辺隸を掠抄し、虔劉して已まらず。毎に稽滯を致し、以て良風を失い、路に進むといえども、あるいは通じあるいは不らず。臣が亡考の済は、実に寇讐の天路を壅塞するを忿り、控弦百万、義声に感激し、方に大挙せんと欲せしも、奄（にわか）に父兄を喪い、垂成の功をして一簣を獲ざらしむ。居しく諒闇にあり兵甲を動かさず。これを以て、偃息して未だ捷たざりき。今に至りて、甲を練り兵を治め、父兄の志を申べんと欲す。義士虎賁文武功を効し、白刃前に交わるともまた顧みざる所なり。もし帝徳の覆戴を以て、この疆敵を摧き克く方難を靖んぜば、前功を替えることなけん。窃かに自ら開府儀同三司を仮し、その余は咸な仮授して以て忠節を勧む』と。詔して武を使持節都督倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓六国諸軍事、安東大將軍倭王に除す。」

令和1年8月16日	翻訳開始	12062 文字
令和元年8月26日	翻訳終了	20878 文字
令和2年6月12日	完訳終了	23177 文字
令和3年10月13日	書下し終了	25021 文字